



静岡県 アプリー・ネットワーク
「社会福祉法人日本聴導犬協会 支援」事業



株式会社アプリー
代表取締役社長
山本芳司さん

聴覚障がい者を介助する
聴導犬の育成を支援

音が鳴っていることを主人に知らせる聴導犬
「聴導犬」という犬をご存知だろうか。目の見えない人を介助する盲導犬はよく聞くが、聴導犬は聞いたことがない、という人が意外に多いのではないか。聴導犬とは、聴覚障がいのある人に、生活で必要な音が鳴っていることを知らせるとともに、その音が鳴っている場所へ主人を案内するように訓練された犬である。

たとえば、玄関のチャイムが鳴ると、チャイムの音がしたことを主人に知らせに行き、玄関まで案内することで、玄関のチャイムが鳴ったことを認識してもらうというもの。このほかにもドアをノックする音、目覚まし時計の音、料理タイマーや笛吹きケトルの音、FAXの音、赤ちゃんの泣き声などを聞き分け、音の鳴っているところまで主人を導いたり、布団やベッドの上に乗って主人を起こしたりすることができる。また、デパートやスーパーマーケットなどで煙報知機が鳴った場合、その場の床に「伏せ」の姿勢を取ることで主人に危険を知らせたり、病院や銀行など



「アピエル募金」から日本聴導犬協会に活動資金を寄贈



日本聴導犬協会を訪問したアプリーのスタッフ

で順番待ちをする際に、順番が来たことを知らせるために受付の人が鳴らすベルを聞いて、受付まで導いたりすることもできる。

静岡市に本社を置き、静岡県(9店)と神奈川県(1店)でパチンコ・パチスロホール「アプリー」を展開するアプリー・ネットワークでは、2005年から聴導犬の育成・訓練、および無料貸与やアフターケアを行う社会福祉法人「日本聴導犬協会」に対する支援を続けている。支援は資金援助だけでなく、協賛イベント会場における聴導犬デモンストレーションのサポート、新入社員による協会訪問なども含まれるが、寄付の原資となるのは、各店舗や事務所に設置された募金箱に来店客や社員が入れる「アピエル募金」である。この善意の募金やチャリティーイベントでの募金、会社からの支援金などが日本聴導犬協会に寄付として贈られ、聴導犬の育成・訓練費用として使われている。

社会的にも意味の大きい聴導犬の育成支援活動

聴覚に障がいがある人は、現在、約35万人いるとされているが(厚生労働省の調査による)、加齢性難聴や自分では気づかない難聴者などを含めると、その数は2倍とも3倍とも言われている。もちろん、それらの人々が全員、聴導犬を必要としているわけではないにしろ、聴覚障がいのある人の生活の質を高めるという意味でも、聴導犬が1

頭でも多いのに越したことはない。

しかし、盲導犬が日本において40年以上の歴史があるのに比べ、聴導犬の歴史は約20年ほどだという。厚生労働省が聴導犬を正式認定したのは2003年のことで、今年の4月1日時点で、認定を受けた聴導犬は61頭と少ないのが現状である(ちなみに盲導犬は1010頭)。支援している日本聴導犬協会は日本に6つある聴導犬を認定できる厚生労働大臣指定法人の一つだが、捨て犬として処分されかねない犬の中から聴導犬の候補犬を選び、「人間の社会的マナー」を教えるソーシャライザーと呼ばれるボランティアと一緒に、育成・訓練にあっている。

1頭の聴導犬を育てるには訓練費用として80万円が必要であり、さらに聴導犬として働き続けるために10年以上のアフターケア代が同じくらいかかるという。日本聴導犬協会では認定された聴導犬を無料で貸与しており、育成や運営にかかわる諸費用への支援を求めている。

昨年12月20日に静岡市の清水ドリームプラザで開催された聴導犬の認知度を広めるイベント「ShiMiZooに聴導犬がきます」では、アプリー・ネットワークが協賛するとともに、新入社員がデモンストレーションの案内係を務めた。このイベントを告知するため、アプリー・ネットワークでは12月11日～15日に協賛スポットCMを静岡朝日テレビで20本放送して、周知に務めた。なお、イベントの様子は今年1月10日に静岡朝日テレビで放送された。



清水ドリームプラザで開催された聴導犬PRイベントの告知ポスター



聴導犬とふれあう来場者たち